
ヴィーゲンリート デア ノーチェ

Strudel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴィーゲンリート デア ノーチエ

【Nコード】

N2138Q

【作者名】

Strudel

【あらすじ】

ノーチエは竜族の少女。

けれども生まれながらに竜族としての力を一切もたない“バジャーゾ”と呼ばれる異端の存在だった。明るく素直で優しく、でもちよつとお馬鹿なノーチエは人間が大好き。そんなある日、憧れの人間に出会えるかもしれないチャンスがノーチエにやってきた。

人間に会おうとする途中、ノーチエが出会ったのは一人の青年。実は彼は竜の王と呼ばれる存在で・・・？

天然少女とそれに振り回される竜の王様のお話。

始まりのはじまり（前書き）

タイトルには一応残酷表現、R15を指定しますが、それほど過激な描写はしないうもりです。多少、きわどい表現があるかもしれませんが、その場合には告知しますので安心して読んでください。

始まりのはじまり

プロローグ

真っ白な雪が降り積もる中、私はパパに手をひかれながら道を歩いていた。

“どこに行くの？”って聞いても、笑って何も答えないパパ。しょうがないから歩くしかなかった。

疲れたなーって思い始めたころ、目の前に小さな家が見えた。

雪でところどころ隠れちゃってるけど、赤い屋根に白い壁。

私がよく絵本を読んで、こんな家に住んでみたいなーって思ってた家。

だから、パパに“今日からここに一人で住むんだよ”って言われてもちっとも悲しくなかった。

あの頃から私は、親に捨てられたってこともわかんない、どうしようもないおバカさんだったんだ。

始まりのはじまり（後書き）

最初はシリアス。王道ですな。

キャラ紹介（前書き）

別に読まなくてもいいですが、読んだほうが設定がわかるかと・・・。

キャラ紹介

【キャラクター】

ノーチエ

竜族としての力を一切持たない“バジャーゾ”の少女。

人間とほとんど変わらない能力しかない。特に物事を深く考えるのが苦手で、何事に対しても楽館的で思ったままに行動する。素直で純真。好奇心旺盛で、自分と変わらない存在であると言われている人間に対して好意を持ち、憧れている。

竜族の名門セトの一族の出身だが、その存在を疎まれているため、実家を出て一人で辺境の村チッタに住んでいる。

桜色の猫っ毛の髪（普段は右にゆるくお団子状に結っている）、空色の瞳をもつ。

雪のように白い肌をもつ。

アジエト

竜族の王の子として生まれ、全てにおいて完璧な青年。

何不自由なく望むものは全て思いのままに手に入れてきたために、退廃的で享乐的。物事に関して無頓着なあまり、他者を思いやることもなく、日々を漫然として過ごしている。成竜となったにも関わらず、つがいをいまだに見つけられない焦りと怒りから、攻撃的な性質も加わり、周囲を悩ます存在となっている。

人間たちからは“空の支配者”と呼ばれ、畏怖の対象となっている。灼熱の炎のような紅い髪（短髪）、海の底のような深い蒼の瞳、浅黒い肌をもつ。

ヴィアルジエ

アジエトの幼馴染で王族に次ぐ名門の一族の出身。

アジエトにとって唯一友人と呼べる貴重な存在であり、彼の右腕で

もある。アジエトの抱える苦悩に対して同情しつつも、誇り高き王となつてほしいと願っている。アジエトのためならば、どんな残酷な手段をも辞さない。

金髪碧眼、眼鏡。知的で温厚な雰囲気を漂わすが、実はアジエトに負けず劣らずの攻撃的な性格。肌は浅黒い。

フランチェスタ

ヴィアルジェと同じく竜族の名門の出身。竜族としての力は強く、アジエトの妃候補の筆頭と言われている。妖艶な美女で、アジエトの恋人として常に傍にいる。プライドが高く、自分より力の弱い竜に対しては高慢。人間を見下し、軽蔑している。女性ながらに苛烈な性格。

金色の髪に氷蒼の瞳をもつ。肌は浅黒い。

他のキャラは、作者が気が向いたら随時更新・・・（多分）

出会い（１）（前書き）

誤字脱字報告お願いします!!!

あと感想もできれば・・・今後の参考になりますので

出会い(1)

小鳥たちのチチチチと鳴く声が聞こえ、朝日が小さな窓から私の顔に射した。

「うむむ」

ベッドの毛布からちゃんと顔の上半分だけ出して、すぐそばにとりあえず置いてある小さな時計を見てみるともうすぐ起きなくちゃいけない時間。

「……もうちょっとだけ」

だって眠いんだもん。

昨日は大好きな人間について特集してたテレビ見ちゃってたし。

「起きろ~~~~~」

突然、ばふつと何かが私の毛布の上に落っこちた。そして私の毛布をひつつかんで、ぱつと取り上げる。不意打ちの攻撃だったから、私はモノの見事に毛布をひっぺがされた。

「こら、パプー!!」

おもわず抗議して睨みつけてやる。でも、私の睨みにもひるまず、私の毛布を取り上げた私のペットの子竜パプーは小さな羽根をパタパタとはたかせながら、フンと鼻息荒く言った。

「いつまで寝てるつもりだ。もう起きてお仕事しないと、ノーチエは何をやってもトロくさいから、仕事終わらないぞ」

「そんなことないもん!終わるもん!」

「そう言っつて、つい三日前に仕事終わなくて半べそかいたのは誰だ?」

「……………私です」

三日前の悪夢を思い出して、途端にしゅんとなる。

人間について書かれた特集記事を読んだら、いつの間にかお仕事をやる時間がなくなっちゃって、あの時は本当に大変だったっけ。

「ほら、ほら、わかつたらさっさと起きて朝ごはんしっかり食べて、

「煙に行くぞ。パイプはお腹がペコペコで死にそうだし」

そう言っ
て下に降
りていつ
てしまっ
た。

パプーのそんな後姿を見ていると、ふと私の寢室の入口のすぐそばにあるカレンダーが目に入った。日付をよく見てみると……今日のところに赤丸がしてある。

「……………あー……………つ！！！！！！」

!!

私は急いで跳ね起きると、そのままいつものように服を着替え、寝ぐせであちこちにとび跳ねた桜色の髪を右にお団子状に結うと、そのまま下に急いで駆け下りた。

だって、カレンダーの赤丸印の横には、でっかく赤い文字で『人間の王様がやってくる!!』って書かれていたんだ。

出会い(2)

ペットのパプーに賄賂（アネッテさん自慢の特製アップルパイ）を渡して今日の分のお仕事を任せた後、私はそのまま私の住んでいる村チッタで唯一の交通機関「GO！GO！空飛ぶ竜の旅」まで走って行って、コルネリア行きの切符を買いに行った。チッタ村は辺境なんだけど、ここから竜でひとつ飛びすれば1時間くらいのところにリゾート地として有名な町コルネリアがある。普段はあまり無駄遣いできないから大きな買い物をする時くらいしか行かないんだけど、今日は特別。

なんと人間の王様がここ、竜の国に遊びに来るのだ！

そんなことを店主のソルティさんに話したら、すごく呆れられた。

「ああ、その話ね。ノーチエちゃんもモノ好きだよなー、人間が大好きだなんて。彼らはつい最近まで竜の力を妬んで、その力をあわよくば手に入れようと誘拐してひどい目に遭わせたりしてたんだよ。現竜王様がそういったやつらを徹底的に追っ払って、やつつけて、国交を断絶したおかげで、国も今のように平和になったんだ。つまりね、ノーチエちゃん。人間はろくでもないやつらだから、関わらないようにしたほうがいいんだよ」

「そんなことないもん。人間だって、みんながみんな、悪いやつじゃないもん。良い人だっているもん。知ってる、今回来る人間の王様はね、竜と人は仲良くするべきなんだって言うてね、それでそのためにそういった悪いやつらが悪いことできないようにするって言ったんだよ。だから今回、その王様はこうやって竜の国に来れるようになったんだよ」

「それだって本当かどうかわからないじゃないか。そうやって騙して、後で悪いことするかもしれないだろう？なんにせよ、1から10まで信じるなんてバカなこととはできないさ。それはきつと俺だけじゃなく、俺たち竜の一族みんなの気持ちだ」

「でも」

「いいかい、ノーチエ。君は人間がどれだけ恐ろしいものなのか知らない。俺たちの世代は実際に人間と戦争をして、嫌というほどやつらの悪いところを見せられている。ノーチエちゃんのように、誰もがみんな、人間を好きになることはとても難しいことなんだよ」

「・・・・むう。難しい」

「ははは！ノーチエには難しすぎるな！ま、気にするな。とにかく楽しんで来い！」

ソルティさんはそう言って豪快に笑い、私の頭をぐしゃぐしゃとかきまわした。

「わーっ、ダメー！髪がぐしゃぐしゃになっちゃうー」

「そんなのすぐに直せるだろー。ていうか、お前、ちゃんとお金持ってきたのか？」

「もちろんだよ！ここに・・・・・・」

お財布を取り出そうとして、気付く。

「・・・・・・ポ」

チ置いてきちゃった」

「・・・・やっぱりな」

私はそのまま猛ダッシュして家に帰ってバッグを取りに戻る羽目になった。

出会い(3)

ソルティさんの背中に乗って一時間。

お昼になる頃に、ようやくコルネリアの町の入口に着いた。

「ふうー、やっと着いたよー」

「ひさしぶりの空の旅は気持ちよかっただろ、ノーチェ」

竜の姿に変身したソルティさんが私の頭上から言った。

「うん！とっても！！」

にっこり笑顔で答える。

私は空が大好きだ。世界がとっても広くて、風は心地よくて、いつでも空を飛んでいたいと思う。できないけれど。

だって私は“バジャーゾ”だから。

バジャーゾっていうのは、竜族の力を持たない竜族。

前に誰か・・・名前は忘れちゃったけど、私のことを“出来そこない”って言うてたっけ。昔は意味がわからなくて、そう言われてもニコニコしてたら、笑われたな。うん、本当に私は“出来そこない”だね。

少しだけへこむけど、我慢、我慢。

そんな私を見て何かを察してくれたのか、ソルティさんは言った。

「なあ、ノーチェ。お前は“バジャーゾ”だからって自分をダメだなんて思わなくていいんだからな。お前は素直で優しくて、とても良い子だ。それは何にも代えがたい大事なことだ。空なんかお前が望めば、俺がいつでもお前を乗せて飛ばしてやる」

「うん！ありがとう、ソルティさん」

私はにこっと笑ってお礼を言った。

そうだよ、ソルティさんがいれば空はいつでも飛べる。それに、空を飛ぶことってそんなに頻繁じゃなくてもいいし。実際、村の人で頻繁に飛んでるのってソルティさんだけだし。

「よし！いい笑顔だ。ああ、そうだ。俺はこのまま帰るが、チツタ

の葉を渡しておくぜ。いまさらだが、使い方はわかるな？」

「えーっと、チッタの葉に火をつければいいんだっけ？」

「それじゃダメだ。火をつける前に葉に俺の名前を刻むか、書くかしろよ。そうじゃないと、意味ないからな」

「火をつける前に葉っぱに名前を書く。わかった！」

「よし。じゃ、俺は帰るぞ。楽しんで来いよ」

「はい」

私が元氣よく返事をする、ソルティさんはそのまま飛び立って行った。

手を振って見送った後、私はコルネリアの中心街ナージエに向かう。人間の王様が向かうのは、記事によると確かナージエで一番有名な高級レストラン。元は王族の宮殿だった場所を一般人に開放するという目的で改装された店内はとっても豪華で、料理も美味しいらしい。入ったことないけど。グルメ通の村長さんが言ってたから間違いない。コルネリアの町の中ならどこでも見える大きな時計を見ると、予定されている時間まであと15分くらいだ。急がなくなっちゃ。

私は全速力で走った。期待に胸を弾ませながら。

出会い（４）

見下ろした眼下にはナージエの整然とした街並み。

リゾート地として名を売っている町らしく、首都サグリダの雑多な街並みと比べれば多少は見栄えがするようだ。

何の感慨もわかず、街並みに対する興味を失った俺は、また視線を室内に戻した。

濃厚な酒と情事の匂い。いつもと同じだ。何も変わらない。

「アジエト、起きたの？」

ベッドから気だるげに俺を見返す氷蒼の瞳。

俺は適当に「ああ」と返す。

「もう、相変わらずつれないわねー。愛し合った後くらい、優しくしてくれてもいいんじゃないの？」

ずっと向けられた手を一瞥し、無視して床に放り投げだされた服を着る。

「時間だ。そろそろお前も着がえろ」

「もう！本当につれないんだから」

そう言つてフランチエスタはベッドから出ると、シャワーを浴びに行つた。

その美しい肢体を眺めていると、まるでタイミングをはかったかのように、コンコンとドアを叩く音。

「ヴィアルジエか？」

「ええ、そうです。あなたたちがあまりにも空気を読んだ行動ができない方たちのようでしたので、心配で呼びに来てしまいました」
ガチャと扉を開ける音と共に、ヴィアルジエが入ってきた。

「これからすぐピアジエの王・・・まあ、我々から見ればただのお子様ですが、彼が転移装置を使つて来るのですよ？いくら格下が相手とはいえ、竜の王であれば、その威厳はこの馬の骨であろうと保つていただかなければなりません」

齒に衣着せぬ物言いに笑っていると、ヴィアルジエは秀麗な顔に不愉快さをにじませながら言った。

「……まったく、あなたのその気まぐれには困りますよ。我々が人間と手を組んで何の意味があるのです？ まさか、300年前のあのクソ忌々しい戦争を覚えてない？」

「まさか。俺とて忘れたわけではない。だが、今度の人間はどうやら今までとは違って少しは楽しませてくれそうだからな。平和な世の中にもそろそろ飽きた。俺を楽しませてくれるのであれば、何でも構わないさ。それが災厄だとしても、な」

「ああ、そのようなことは私とフランチェスタの前だけにしてくださいね。あなたの性格が極悪非道であることは、公然の秘密なのですから。そろそろいい年した成竜なのですから、それっぽく振舞ってくださいよ」

「まったく。お前にだけは言われたくない。それに、いい年であるにも関わらず、いつまで経ってもふさわしい雌竜が現れないこの現状を憂う俺の気持ちもわかるだろう？ なあ、友よ」

「名だたる美女をとつかえひつかえ、よろしくやっているじゃないですか。どこが不満なんですか」

「どこが不満だと？ 成竜の性を知らぬわけでもないお前が、どの口で言うセリフだ」

「失礼。そりゃ同情しなくもないですよ。成熟した竜はすぐに繁殖のために雌を探す。しかし高位の竜であればあるほど、子を産むだけの力のある雌竜はなかなかおらず、本能に反して繁殖できない状態が続き、やがてマンネリ化し、雌竜だったらなんでもよくなり、やがて繁殖そのものを諦め、ひたすら動物的本能のままに快楽に溺れる悪循環が」

「ヴィアルジエ、死にたいか？」

「失礼、つい本音が」

「もついい。さて、俺は先に向かおう。お前はフランチェスタを連れて来い」

「ワガママ女のご機嫌取りは仕事に含まれていませんが？」

「なら、今をもって仕事に含めよう。任せたぞ」

「はいはい、わかりましたよ」

そのまま俺はドアからではなく、窓から外に出た。

別に理由はない。ただの“気まぐれ”だ。

この退屈な世界に多少の気分転換は必要だ。

出会い(5)

私は今現在、お店の人と“交渉中”だった。

「あのね、お嬢ちゃん。ウチは超一流で通ってるんだ。だからお嬢ちゃんみたいなぼつと出の田舎もんにはウチの敷居はまたげないんだよ」

「何でよ！レストランではお客様は神様なんでしょ？！私は客よ！」

「だーかーらー、そのお客様っていう資格がお嬢ちゃんにはないの！ここに来るのは貴族の人だけ！」

「嘘！チッタ村の村長さんだって来たことあるって言ってたもん！」

「チッタ村の村長？ああ、あの人は食通で通ってるからいいんだよ。とにかくお嬢ちゃんはダメだ。大人しく近くの軽食屋でご飯食べて帰りな」

「ケチーっ！」

“交渉”に負けた私は、最後の捨て台詞を残し、そのまま店の前から走りだした。その後姿にやれやれと首を振って、お店の人は店内に戻っていく。

ふふふ。チャーンズ。

これ待っていたのだ。私はそのまま戻り、今度は裏口にまわった。そう、門前払いを食らうたてのはなんとなく予想していた。けれども、どこの誰がその後大人しく逃げ帰った小娘が再び戻って来て、しかも裏口からまわって忍び込むなんて大胆発想を思うだろうか、いやない！

ささっと裏口にまわり、店内に忍び込む。人は厨房に集中してるだろうから、要は厨房に近寄らなければいいはずだ。そう思った私は、そのまま人の声がたくさんするほうから足を遠ざけた。しばらく歩いてみてわかったのは、さすがに宮殿だったわけで、ものすごく広く広いつてこと。そして、ろくに場所を把握せずに入っちゃった私は、今ものすごく困っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・こごごご」
「？」

へにやりと情けない声が出た。

近くの部屋でたまたま見つけた時計を見ればもうあと5分くらいでお食事は始まってしまはずだ。早くレストランに行かないと、見れなくなっちゃう。

焦る思いとは裏腹に、歩いて行けば行くほど奥に入っちゃってるみたいだった。さっきまではメイドさんっぽい人がちらほらいたのに、今では誰もいない。

途方に暮れた私は、たまたま見つけた中庭の噴水に座っていた。

もうどうすればいいのかわからないよ。もういまさら間に合わないだろうし。

せっかく貯めたお小遣いをはたいてやってきたっていうのに・・・・私のバカ。

「どうしてこんなに何をやってもダメなの」

じわりと視界がにじみ、目元が熱くなる。

ポタと滴がこぼれた時、不意にそばでガサガサと音がしたかと思うと、背の高い男の人がぬつと茂みの中から現れた。

「むきや！？」

突然の事態に頭がパニックになる。

慌てて立ち上がり、逃げようとする私の首根っこをぐわしとつかむと、男の人は私を自分の視線の高さまで持ち上げて言った。

「・・・・・・・・ “人間の子供” がどうしてこんな場所にいる？どうやって入った？ここに入るためには宮殿の迷路を通らなければならず、人間には絶対に近寄れないようになってるはずなのだが・・・・」
私はぼかんとして男の人を見た。

高位の竜であることを証明する浅黒い肌。今まで見たことないくらい紅くて、私と同じでちょっとクセっ毛の短い髪はゆるやかに耳にかかっている。でも何よりも印象的なのは顔だ。すっと通った鼻筋、男性的な鋭利なラインの顔つき、長いまつげ、そして全てを飲み込

むような深い蒼の瞳。

「ほえー、超美形だー」

私がおもわずもらした言葉に、少しだけ瞳が大きくなる。ちよつとびつくりしたのかな？よくわかんないけど。

「・・・お前、今の状況をわかって言っているのか？この場で食べられても文句は言えないんだぞ」

「・・・」

じーっと見つめあう瞳。

だってなんて言えばいいのかわかんなかったんだもん。「人間じゃなくて、バジャーゾです。実は忍び込もうとしたら迷子になっちゃって・・・それで途方に暮れてたんです」なんて訂正するのちよつと恥ずかしいし。

とりあえず男の人の目がとてもキレイだったから見てた。

一方、私が見つめる瞳は驚きから次第に呆れたような感じに変わる。「・・・まあいい。お前みたいな変なのだったら、“偶然”というのもありえる話だ。しかし人間の子供を連れてくるとは、ピアジェの王も酔狂なものだ。一体、何の意図があるのか・・・」

「人間の王様っ！？会えるの！？」

ピアジェという言葉に耳が反応する。だって、何度も何度も文字や音で確認したのだ。ピアジェって毎日10回は復唱して忘れないようにした。困った時のおまじないにも使った。それくらい大事なキーワードだ。

「会える？しよつちゅう見ているのではないのか？」

「ねえ、お願いです！ピアジェの王様に会わせてくださいっ！」

「・・・よく意味がわからんが、いいだろう」

「わーい！！やったー！！！！」

なんていう幸運！

もう絶対に無理だと思ってたのに、この親切な人が会わせてくれるなんて！

「本当にありがとうございます！恩に着ます！この親切は忘れませ

ん！」

「あ、ああ。別に忘れてもらっても構わないが」

首根っこをつかまれたままではしゃぐ私を、不可解なものを見るような眼差しで見つめていた男の人は、そのまま私を地面に下ろすと「こっちだ」と言ってそのままスタスタと歩いていってしまふ。

「あー、待つてくださいー」

私はその後姿を一生懸命見失わないように付いていった。

出会い(6)

私はほえーっとしていた。

だって、会わせてくれるって言われた時は、遠くからこっそりって意味だと思ってた。

でも、そうじゃなかった。

「お初にお目にかかります。偉大なる竜の王アジエト。僕はピアジエのオニス。この度は、貴国が我が国の親愛の意を受け入れてくれたことをとても感謝している」

目の前で上品に礼をする若い男の人。荘厳な衣類を身にまとい、なんだかとてもキラキラしてて、かっこいい。顔をあげた時、一瞬だけ目があった。私と同じ空色の優しい色合いの瞳が私を見て穏やかに微笑む。ほえー。おもわずため息がでる。髪は残念ながら柔らかい肩まで伸びた金色だけど、肌の色も似てるし、とにかく私と容姿が似てて親近感がぶわーってわいた。ピアジエの王様は、小さい頃から憧れ続けた絵本の王子様そっくりだった！

この人が、ピアジエの王オニス様なんだ。

いまずぐ握手してもらいたい衝動に駆られたけど、耐えた。だってすぐ後ろにはものすごい顔でこっちを睨みつけているすごいキレイな女の人がいんだもん。黄金に輝く長い髪を上品に束ね、浅黒い肌が映える派手なワインレッドのドレスをまとった美人さんは、私が親切な男の人の後ろからのこのこと付いてきたのを見た瞬間、女神から魔王に豹変した。(あれは人生でワースト3に入るビビった瞬間だった)

そしてもう一人、私を穏やかに見つめている・・・ふりをしている人。こっちもすごく怖い。金髪碧眼で眼鏡をかけたインテリ風の超美形さん。親切な人が私を背中では隠してくれなかったら、きつと笑顔の裏に隠された殺人ビームで私は死んじやったと思う。

唯一私にとって頼りになさそうな親切な人は私を横に座らせ、給仕

によつて注がれた赤ワインを優雅に飲んでいた。

前に座つたオニス様が緊張しながら接しているのを見て、なんだか不思議な気持ちになる。人間の王様だから偉いはずなのに、どうしてかな？

でもちよつと前のシーンを思い出してみる。

・・・オニス様は、この親切な人をなんかすごい呼び方してなかったっけ？

私がちらつと横を見ると、私を見つめる深い蒼の瞳と目が合った。びっくりしていると、彼は視線を前にうつし、オニス様に向かつて言つた。

「ピアジェの王よ、この度は貴国の親愛の意をくみ、同盟を結ぶことを了承した。これは我々にとつても貴国にとつても重要な決断だ。そうだな？」

「もちろんです、竜の王よ。これは人と竜が300年の時を経て再び邂逅したという意味でも、歴史に記されるべきこととなるでしょう」

「そうだな。では、問うが、その重要性を理解してなお、このような娘を連れてくる貴国の考えは、少々我々には理解しかねるな。遊び心とはいえ、少々度が過ぎるというものだ」

オニス様はそれを聞いて、怪訝な顔をして私を見た。

「いえ、あの、失礼ながら何をおっしゃっているのかわかりません。僕が従者を連れてきたことは認めますが、その子は連れてきていません。僕はむしろ、あなたがたが多少の遊び心をもってこの会見に臨んだものとはかり思っていたのですが・・・」

「なんだと？」

その場にいる全員の視線が私に集まる。

「やはり、バジャーズか」

親切な人の言葉に同意するように、私はこくりと頷いて言つた。

「・・・騙しててごめんなさい」

うつむいて謝ると、バンというテーブルを叩く音。

「謝つてすむこと！？これは国家間の最重要事項なのよ！誰もが聞いていい内容ではない、しかも“出来そこない”のバジャーゾですって！？竜族の恥さらしが、我らが王の隣に座るなんてあつてはならないのよ！？」

「おやめなさい、みつともない。王、御判断を」

「……とにかく、その娘は別室に連れていけ。手荒な真似はしないようにな。連れてきた俺にも多少の責任はある。ピアジエの王よ、すまないがこの会談はまた後日ということでもよろしいか？この状況では、できるものもできなさそうなのでな」

「もちろん構いません。こちらもそのほうが助かります」

私はそのままやって来た兵士さんたちに取り囲まれながら違う部屋に連れていかれた。きつと、オニス様に会ったことで、一生分の幸福を使いきっちゃったんだと思う。

会談を終了させ、俺は娘のいる部屋までヴィアルジエとフランチェスタと共に向かっていった。

「まったく、今日は最悪の会談でしたよ。まさか“バジャーゾ”が紛れ込んでいたなんて……」

「まったくだわ！それにあなたに声をかけたり、のこのこ付いてきたり、身の程知らずにもほどがある。あなたもあなたよ、アジエト。あの子の正体を知りながら、それを放置したのはあつてはならないことだわ」

「私もフランチェスタと同じ意見です。“バジャーゾ”に生きる資格はない。先代の竜王がおっしゃっていたはずです。彼らはあまりにも異質で、同時に人間に近い存在。いわば危険因子なのですよ」

「あの娘が危険因子？非力な力で俺を殺すというのか？」

「ああ、あなたのその退廃的な性格を恨みます。それでどうするつもりなのですか」

「“処分”すべきですわ。どうせ価値のない命。死んで生まれかわるほうがあの娘のためでもありましよう。私めに、その仕事を」

「確かに。見せしめとし、このようなことが起こらないようにすべきではある」

娘のいるドアの前まで着いた。

俺の指示を待つ二人に言う。

「・・・ここで待っている」

「王」

二人の咎めるような声を視線で制す。

俺は王だ。

国のためならどんなことも厭わない。それが本心でなくても。

二人の言い分は正しく、王として判断するのであれば“処分”しなければならぬ。

けれども、心のどこかでそれを拒む思いがあった。

それが何かはわからない。ただ俺に、あの娘を生かせ、と。

今まで抱いたことのない不可思議な感情の正体を確かめるために、

俺は扉を開けた。

出会い（7）

ギツと重厚な扉が開かれる音共に、親切な人がやってきた。うっん、親切な人なんて肩書きで呼んでいい人じゃない。

竜族の中で最も偉い人。私なんか、話しかけていい人じゃない。

「……ごめんなさい。アジエト様だなんて、知らなくて。あんな失礼な態度をとってしまいました」

もう一回ぺこりと頭をさげる。許されるはずがないけれど。

「別に構わない。俺もお前が“バジャーゾ”と気付いていたにも関わらず何も行動をとらなかった。ここまで大事になったのは、俺の責任だ。今回の責は俺にある。お前は何も気に病む必要はない」

優しい言葉とともに、ふわりと大きな手が私の頭に置かれる。不思議な気分だった。今まで感じたことのない温かさが、私を安心させてくれる。

「本当にお前は何者なのだ？俺がここまで他人に優しくなることは滅多にないというのに、なぜかお前にはこのような態度をとってしまふ。自分でも信じられないことだが」

「私はノーチエです。アジエト様。チッタ村のノーチエ。それ以外に名前はありません。えっと、“バジャーゾ”って肩書きはあるんだけど、好きじゃないから使ってほしくないし、でもそう言われたらはいって言うしかないし」

私のよくわからない自己紹介に口元をゆるませ、アジエト様は私の隣に腰をおろした。

「お前は単純でいいな。処刑されるかもしれないというのに、そんなにノーテンキなやつは見たことないぞ」

「え！？私、処刑されちゃうの！？」

私の裏返った声を聞いて、アジエト様は今度は遠慮しがちの笑いから大笑いになった。

「ははは！安心しろ、処刑などしない。ノーチエ、お前はつくづく

俺を楽しませてくれる愉快的な存在だ。そんな貴重な存在を俺がみすみす殺すわけないだろう」

「……よくわかんないんだけど、とりあえず死ななくてすむみたい。」

「よかった。まだ、オニス様のサインもらってないし」

「オニス？なぜ、ここであの人間の名が出る？」

オニス、という言葉聞いた瞬間、アジエト様の機嫌は悪くなった気がした。何か嫌なことでもあったのかなーとか思いつつも、私は自分の気持ちをおそろおそろ口にだす。

「え、えと、私、ずっと人間に憧れてて、それで、特にオニスは私の理想の王子様で、えと」

「つまり、お前はあの人間に好意を抱いているというわけか？」

「はいっ！そうなんですっ！！」

自分でもぱつと顔がほころんだのがわかった。

だって、私と似てるんだもん。

しかもオニスは優しいおとぎ話の王子様タイプで、ものすごく顔も好みだった。

おもわずやってしまった大告白に恥ずかしくてかーっとなって、私はうつむいた。

だから気付かなかったんだ。

私を見下ろしている冷たく凍えるような瞳を。

「……そうか」

感情をとまわらない無機質な声がした。

私が顔をあげると、表情を消した美貌が目の前にあった。

「……お前が望むのであれば、お前をあれに会わせてやろうか？」

はい、と条件反射で言おうとしたけれど、でも、なんだかそう言うてはいけないような気がして、私は口をつぐんだ。

「えと……」

「すぐに決める必要はない。俺もあれもしばらくここに滞在するこ

とになるだろうからな。それよりノーチエ、もう日が暮れかけているが宿はとっているのか？」

「え？」

部屋にあつた時計を見ると、もう夕方だ。

そろそろ帰らなければソルティさんに悪いし、なにより家でパプーも待っている。

「そろそろ帰らなくちゃ！アジエト様、帰ってもいいですか？」

「そう急ぐこともないだろう。どうだ、俺と晚餐を共にしないか？晚餐では一流のシェフたちの一流の料理と国中から集められた一流の美酒が振舞われる。それにも遅くなったとしても、宿などいくらでも手配してやる」

私の桜色の髪を一房とり、指でくるくると絡めて遊びながら、アジエト様は優しい声音で言った。

私としてもその提案にはぐつとくるものがある。特に料理つてところあたりに。でも、やっぱりパプーは放っておけないよ。晩御飯抜きなんてかわいそうだもんね。

「本当に嬉しいんですけど、でも帰ります。ごめんなさい」

「・・・・・・そんなに俺といたくないか？」

「えっ？」

思ってもみなかった冷たい切り返しにびっくりして、おもわず私はアジエト様を見た。

「もういい。さっさと出て行け。俺の前から失せろ」

突然の怒鳴り声。

怒りの矛先を向けられ、私は固まった。動けない。

頭の中では“逃げろ”ってわかってるのに。

「お前の顔を見るのも不愉快だ、ノーチエ。俺にその細首をねじ切られたくなかったら、すぐに消えろ！」

突然、バンと扉が開いてさっきの金髪碧眼の眼鏡さんが私のところまで走ってきた。そしてぱっと私を抱き上げ、そのまま外に急いで出て行く。

外に出た瞬間、すごい咆哮と何かが壊れる大きな音がした。

私は眼鏡さんに荷物のように担がれたまま、その扉をぽかんと見ていた。

「まったく、君はやはり“バジャーズ”だ。あれをあそこまで怒らせるなんて、大した大物だよ」

「ふん、そのまま殺されれば良かったんだわ」

ふと横を見ると、美人さんが私を睨んでいた。美人さんは私の鼻にびしつと長くてきれいな指を突き付けて言った。

「いいこと？ “バジャーズ” 風情が調子に乗るんじゃないわよ。いくらアジエト様が優しいからって、勘違いしてはダメなんだから。

今日のことは忘れて、平凡に世界の端っこで慎ましく生きていなさい。もう二度と、私たちに関わらないで」

「・・・私はただ、人間さんが好きって言ったただだよ？」

「やはり“バジャーズ”の発想は根本的に我々とは違うな。いいかい、君の言っていることは我々からすれば、まったくもって頭がイカれている判断されても仕方がないことなんだぞ」

「王は人間を良く思っていていらっしやらない。怒るのは当然だわ」

「・・・」

はあ、とため息をつき眼鏡さんは私を降ろして言った。

「とにかく君は帰れたまえ。正直、君の相手は疲れる」

むっとしたけど、でもこの人たちは人間さんが嫌いなんだなって思ったから、これ以上何も言わないことにした。きつと、ソルティさんが言っていたように、人間さんと仲良くすることは、ほとんどの竜族の人にとって難しいことなんだと思ったからだ。

私は兵士さんに出口まで案内されて外に出た。その間、一言も話さなかった。そして外に出て、町の入口まで着いた時、私はポーチからチツタの葉を一枚取り出す。

「えーっと、確かここに名前を書いて、と」

ちゃんとばっちし覚えていた通りに「チツタ村のソルティさん」と名前をペンで書いた。

あとは火で燃やすだけ……。

そこでふと思いつく。

「……どうやって火出せばいいの？」

竜族だったら生まれた時から誰でも火は出せるけど、私は“バジャ
ーゾ”。

市販の火をおこすマッチとかないとつけられない。けれど、もうお
店は全部閉まっている時間だ。マッチは買えない。

「どうしょー」

私はチツタの葉を見てつぶやいた。

出会い(8)

俺は半壊した部屋に突っ立っていた。

「また派手にやってくれたもんですね」

背後から呆れた声。

「御心配なく。あなたを煩わせる娘は帰りましたよ。ついでに、フランチエスタには晚餐に遅れるように言付けを頼みましたから」

「そうか」

俺はかろうじて破壊を免れた椅子に座った。

いまだ怒りは残るが、それよりも喪失感が大きい。

あの娘をヴィアルジェが連れていった瞬間、今まで抑えていたものが瞬間的に沸騰し、そして弾けた。

「あなたを怒らせた理由はなんですか？」

「聞いてどうする？」

「今後の参考に、ですよ。我々だって進んで地雷踏みたくありませんから」

「・・・別に、どうということはない。ただ、不愉快だったただけだ」

「食事に誘ったのに断られたからですか？」

「・・・」

俺の無言を肯定ととらえたヴィアルジェは天井に向かって顔をあげ、片手で顔を覆って言った。

「・・・なんとということだ。こんなことが起こりうるとは・・・」

「どういう意味だ？」

「どういう意味？それを私に聞くのですか？もう、ご自分でもおわかりでしょう。あの娘は、あなたの“つがい”ですよ」

ガシャーンと窓が割れる。

「・・・あれが、俺の“つがい”だと？」

「認めたくはないでしょうけど、そうとしか考えられないでしょう？あの娘の言うことに、あなたは逆らわない。それどころか望みを

叶えようとすらする。絶対に他者に対して愛情を示さないあなたが、愛情ともとれる行動をとり、挙句・・・ああ、晚餐に誘うなどという求愛行動など取るなんて・・・！」

バカな、そう言いたい気持ちかがのど元まで出かかり、しかしそれが声となって発せられることはなかった。

すべてが論理的に考えれば、わかることだったからだ。

この俺が、王であり、全てにおいて秀でた最強の竜が、あのような矮小でちっぽけで取るに足らない存在に振り回されることなどありえないことなのだ。

全ては、一つの可能性に帰結する。

「だが、それは不可能だ。力を持たぬ“バジャーゾ”に繁殖する力はないはず」

「雄竜は“つがい”を間違えたりしません。決して。されど、王。

あの娘は我々が求めるものとはあまりにもかけ離れ、ともすれば対極を行く存在であることに違いはありません。悠久の時を生きる我々にとつて、“つがい”は一人ではない。今ここであれを選ぶのは得策とは言えない」

「つまり俺に、ようやく見つけた“つがい”を諦め、また気の遠くなるような時を待てと、そう言いたいのか？」

「女などいくらでも望めば手に入るでしょう？」

冷笑を浮かべたヴィアルジェに俺は「出て行け」と告げた。

「・・・あの娘に手を出すというのであれば、それ相応の妨害は覚悟なさったほうがよろしいですよ。無残な死骸を見たくなければ、手を出さぬことです。ああ、それと、今夜の晚餐は取りやめにしましょう。あなたにこれ以上高価な調度品を破壊されたくありませんからね」

そう言つて優雅に一礼してヴィアルジェは出て言った。

俺はしばらくその場に留まって考えていた。

ようやく見つけた悲願の“つがい”との出会い。諦めかけていただけに、ヴィアルジェに指摘され、自覚した途端に本能が俺にあの娘

に会いたいと告げる。

今すぐこの手の中に閉じ込め、後宮で誰の目にも届かぬ場所に連れて行きたい。

俺だけのものにしたい。

それが俺の、雄の竜の性。

だが理性では“バジャール”という異端の存在を忌み嫌う俺がいる。人間を好きだとあけすけもなく言う愚かさを思い知らせてやりたいと、滅茶苦茶にしてやりたいと。

俺は娘、ノーチエを考えることを中断した。

彼女を思い出してはいけない。

だがふと、彼女の困った顔が浮かんでしまう。

彼女は無事に家に帰れたのだろうか？

“バジャール”は無力な存在だという。

彼女はいつだって困っている。

そう、初めて会った時と同じように。

俺は気付いた時には彼女の“匂い”をたどっていた。

漆黒と緋の鱗をまとった誇り高き姿となり、空を舞う。

人が“空の支配者”と怯え、敬う絶対的な姿となって。

空を舞う美しい竜の姿を目で追いながら、ヴィアルジェは眉間をおさえた。

「まったく、これだから雄の竜というのは愚かだというんです」

彼にとってこの状況は良くない。むしろ非常に悪い。

フランチェスタの烈火のごとく怒り狂う様が目に浮かぶようだ。

雄の竜にとって“つがい”は庇護すべき絶対的な存在。

非力で厄介事しか持ち込まない“バジャール”をいちいち庇護することに目覚めでもすれば、それこそ政務に支障が出かねない。身を守る術をろくにもたないが故に、狙われることも多いだろう。

抱える問題のあまりの大きさに気が遠くなりながら、ヴィアルジェは手持ちの書類に目を通した。

出会い(9)

「ノーチエ」

原始的な方法、つまり木の皮に棒でぐりぐりと摩擦を加えながら火おこしを試みていた私は、頭上からの声に顔をあげた。

そこには漆黒と緋の鱗をもつ一匹の巨大な竜がいた。

「……失礼ですけど、どなたですか？」

「声を聞いてもわからないか？」

その声を聞き、うーんとうなる。

私は自慢じゃないけど、記憶力がすごく悪いのだ。でも必死にうーんとうなって考えてみたら、思い当たる人がいた。

「……アジエト様だ！」

私がつこり笑って言うのと、目の前の竜アジエト様も上機嫌に鼻を鳴らした。

私は火おこしを中断して立ち上がり、アジエト様の鱗にそつと触れる。ソルティさんのおそらく2倍以上はあるかつてぐらい大きい体で、鋭い爪はきつと岩とかまるで砂の山をえぐるように簡単にできちゃうんだろう。なによりも、艶のある鱗は神秘的で、昔人間さんが竜の鱗はこの世で最も美しい宝石である、って言ったのはきつと嘘じゃないと思う。こんなにキレイなものは、きつとどこを探しても見つからないに違いない。

「アジエト様はどうしてここにいるの？私、さっき怒らせちゃったのに」

「もう怒っていない。それに、ノーチエが無事に家に帰れたのか心配になった。案の定、帰れてなかったな」

そう言ってまた鼻を鳴らした。

「うっ。だ、だって、火がないんだもん」

「火？」

「これ、チッタの葉って言うんだけど、これを使つためには火が必

要なの」

「ああ、なるほど。それで迎えの者でも呼ぶつもりだったのか？」
「うん」

「ならば、俺の背中に乗ればいい。わざわざそのような面倒な手間などかからない。俺の背中に乗れば、すぐに着くだろう」

「えっ！？アジエト様の背中！？」

「なんだ？不満だというのか？」

「そ、そうじゃなくて！だって、王様の背中だよ！？」

「気にするな。俺がいいと言っているのだ」

「でも」

「ノーチエ」

諭すような声に促され、私はちよつと怖かったけど背中に乗った。ソルティさんの背中では慣れているけど、でも全然違う。

「しつかり掴まっている。振り落とされたら、笑えないからな」

「うんっ」

私の返事と共に、背中 of 大きな翼が広がり、一瞬で空に浮かぶ。

アジエト様はすごい速さで空を舞った。ソルティさんの背中に乗った時よりも遥かに早く、そして安定した飛び方だった。

「すごいっ！すごいよー、アジエト様！！」

「ノーチエ、チッタはあそこに見える村か？」

「うん！わー、もう着いちゃったんだ！！」

きつと飛んでいた時間はほんの一瞬だ。

私は自分の家の近くの草原に降り立ってもらった。

「ありがとう、アジエト様」

「礼はいらない」

人の姿に戻ったアジエト様はそう言って私の頭を撫でた。

「ところで、ノーチエ。お前の家とやらを俺に案内してくれないのか？」

「うん、いーよ。ついでにご飯でも食べていきますか？」

「それは嬉しい提案だな」

アジエト様は上機嫌で答える。良かった、さつきは怒ってたけど、今は怒ってないって本当みたいだ。

私はアジエト様に私の小さなさやかな家を案内した。

「ただいま、パプー」

「おかえり〜！腹減った〜、飯食わせろ〜」

飛び出してきたパプーが私の顔に張り付く。次の瞬間、べりつと何かがひきはがした。

「誰だ〜??」

翼をつかまれ、わたわたするパプーを捕まえたアジエト様は、それをぽいつと外に放り投げるとそのままドアを閉めた。

「あ、パプー！」

「少し外にいたいようだ。ノーチエ、俺はのどが渴いた。何か飲み物をできればもらいたいのだが」

「あ、はい」

私がアジエト様にお茶の用意をしている間、アジエト様は小さな家を一人で見学し、お茶が出来上がるころには夕食が食べたいと言いつ出した。

王様に失礼なことしちゃいけない！ってことで頭がいっぱいだったから、その日のパプーはずーっと私が気付くまで外で夕飯はお預けだったのだった。

夜遅くになって、さすがに戻らなくちゃいけないということで、名残惜しそうな顔をしながらアジエト様は帰っていった。別れ際に、アジエト様はコルネリア行きの時空転移の魔法を私の部屋に設置していた。これを使えば、一瞬でコルネリアのアジエト様の部屋につながるんだそうだ。使う機会ないだろうな〜って内心想ってたなら、明日今日のお礼をしたいから来るようにと念を押された。きつと、私が理由もなしに使ったりしないことをわかってたんだと思う。

「今日は酷い目に遭った。アイツ、嫌いだ〜」

パプーはリンゴをガジガジしながら言った。

「アイツなんて言ったらダメだよ、パプー。あの人はアジエト様っ

て言つて、すごく偉い人なんだよ。竜の王様なんだから」

「でもパプーに大人げない行動とつたぞ」

「ちよつと悪戯したかつたんだよ、きつと」

私はベッドで毛布にくるまって言つた。

しばらくしてリンゴを食べ終えたパプーが私の顔のすぐ横でぐでんと転がつた。

「今日は畑の仕事頑張つたぞ。だからパプーも明日、コルネリアに行きたいぞ」

「うん、いいよ。明日は雨だから、畑の水まきしなくていいからパプーも連れていけるもんね。せつかくだから、アップルクッキーを買つてあげるね」

「楽しみだぞ」

「うん、楽しみだね」

いろいろあつた一日を振り返りながら、私は目をつぶつた。パプーのプーピーというびきを聞きながら、明日のことが楽しみでなかなか眠れなかつた。

出会い(9)(後書き)

ひとまず、ここで一段落・・・！
後はもう一つの獅子物語と並行して頑張りたいと思います。。
応援、よろしくお願いします(^^)

お茶会（１）

「起きろ、ノーチエ！」

「むむう」

ボフボフと毛布を叩くパプーが目に入り、眠気眼をこすりながら私は起きた。

「なあーに、パプー。今日はアジエト様に招待されてるからお仕事ないんだよ。それに今日は雨だし」

「雨じゃないぞ。天気予報士のモーチャさん、大ハズレだぞ」

「んー・・・って、えーっ!？」

私は急いで飛び起きてカーテンを開けた。そして、へたりと座りこんだ。

「そんなー、これじゃ遊びに行けないよー」

外には太陽が明るい日差しを注いでいる。

こうなってしまうと、畑の仕事をサボるわけにはいかない。

だって、それで私は生活してるんだもん。

もし野菜がとれなくなったら、生活できなくなっちゃうもんね。

「しょうがないね。行くのは諦めて、畑の仕事をしようか」

「アップルクッキー、残念だ」

私は畑で仕事をしやすい服に着替え、朝ごはんを食べ、パプーと一緒に歩いて１０分くらいのある小さな畑にやってきた。

「さて、今日も元気に頑張ろう！」

「お」

二人で黙々と作業に取り掛かったのだった。

お昼頃になって、パプーと一緒に家で作った自家製のサンドイッチを食べていると、なぜか昨日の眼鏡さんがやってきた。

「どうやってやってきたんだろ?」と思いながらサンドイッチを食べていると、ものすごく怒っているらしく眉間に皺をたくさんよせて

いた。眼鏡さんはコホンと咳払いをして言った。

「……ノーチエさん、今日は先約があったはずですが？」

「先約？何かあったかな、どう思う、パプー？」

「アップルクッキー！」

「ああ、そうか！それ、すっかり忘れてたよ。あとでアネツテさんに頼んでもしリンゴがもらえたら、作ってあげるね」

「わーい」

「こらこら、そんなどうでもいい内容を思い出さないでください。

私が言いたいのは、君はアジエト様から招待されていたということです！いつまで経っても来ない君に業を煮やした王が、私に迎えに来させたんです！」

「うん、そうだけど。でも、天氣が晴れちゃったら、私は畑の仕事をしなくちゃいけないんだよ。ちゃんとやらないと、作物はすぐダメになっちゃうし」

「優先順位を間違えていませんか？どこの竜族が王の誘いをすつばかり、畑の仕事に行きますか？常識で考えれば、どちらを優先すべきかわかるでしょう！」

「でも、これに生活がかかってるし……」

「だとすれば、アジエト様に助けてもらえばいいことです。あの御方の一声で君の生活などいくらでも変わるだろう。良くも悪くも、ね。さあ、無駄なおしゃべりはやめましょう。王がお待ちです。すぐにその泥だらけのみつともない格好をなんとかして、私と一緒に来てください」

「え、無理だよー。畑のお仕事が終わってから。うまくいけば、今日は夕方には終わると思うし」

「王は君と違って多忙なのだ。今、来てもらわねばならない」

「じゃ、今日は断ります。ごめんなさい。また後日、雨が降ったら行きますって伝えておいてくれませんか？」

「いい加減にしてくれませんか！？どこの竜に、君なしで王の前にこのこ帰れる自殺志願者がいるというのです！ああ、もう、面倒

な娘だ！」

眼鏡さんはパチンと指を鳴らした。すると、畑の上にだけ雲が出来て、それが雨を降らし、大地を濡らしていく。

「うわー！！」

私はおもわず拍手してしまった。

「高位魔法だ」

横のパプーもそれを見て拍手している。

一瞬で水まきが終わり、眼鏡さんは私を見て言った。

「これで文句はないはずです」

「うん、ない！」

私はにっこり笑って言った。

私はサンドイッチを全部口にほうばり、農具を持つと、そのままさっさと家に戻る眼鏡さんの後ろを付いて行った。

お茶会（２）

「待ちわびていたぞ、ノーチエ！今日は来ないのかと思っていた」
「えと、来ない予定だったんですけど、眼鏡さんが助けてくれたから、来れるようになりました」

「そうか。眼鏡もたまには役に立つのだな」

「眼鏡、眼鏡と失礼な。私にはヴィアルジェという名前があるんですから、ちゃんとそっちで呼んでください」

昨日と同じ宮殿の奥。

アジエト様の話によると、一般には公開されていない王族専用の居住スペースらしい。私がアジエト様と初めて出会った噴水の横にテーブルと椅子が設けられ、テーブルの上には色鮮やかなデザートが所狭しと置かれていた。

「さあ、座ってくれ。ノーチエはどの菓子が好みか？もしなければ好きなものを言え。すぐに用意させるから」

私はアジエト様の隣に席を設けられ、ちよつと緊張しながらも座る。アジエト様は白い皿を一枚とると、そこにどんどんケーキをのせて私の前に置いた。

「うわー、いただきますーす」

「いただきますなのだ」

私がフォークでイチゴのショートケーキを食べている間、パプーはそれ以外のケーキをどんどん手でつかんでは口に入れていく。

「おい、お前は呼んでないぞ」

「気にするな。ノーチエとパプーは一心同体なのだ」

眉をひそめたアジエト様がパプーをつかむと、そのまま遠くに投げ飛ばした。

「ありや」

「あ、パプー！」

「ちよつと運動不足みたいだから、運動させろ。菓子はまだたくさん

んあるのだ、あれを心配するようなことは何もない」

そう言うと、アジエト様はパブルーによって食べられてしまったケーキを再び私のお皿に載せた。

「・・・アジエトが甲斐甲斐しく奉仕する様を見たの、人生初なんだけど」

私の斜め右に座っていた美人さんがテーブルに頬杖をつき、不機嫌さをにじませて言った。そして皿を一枚とり、アジエト様に向かって突き出す。

「アジエト、私もとって」

「フランチェスタ、お前は自分で好きなものを取って食べ」

「何その差別！私たち、今までベッドを共にした間でしょう？なんでポツと出のこの子のほうが、私より大事にされるのよ！！」

「しょうがないでしょう。昨日も説明したとおり、彼女は王の“つがい”である可能性が高いのですから」

「でもそれは100%保障されたわけじゃないわ。力のない者に王の子は産めない。この子は“バジャーゾ”なのよ？ありえない」

「では、王の直感が間違っている？」

「それはわからないわ。なんにせよ、証明するものが何もない以上、特別扱いはやめたほうが賢明ね。竜の雌は嫉妬深いのよ？」

フランチェスタと呼ばれた美人さんはそう言っさくらんぼを手に取り、それを舌でぺろりと舐めた。

「あなただって、怖い思いはしたくないでしょ？ノーチエ」

挑むような眼差しのフランチェスタさんに、私はしどろもどろになっって答えた。

「えと、その前に、聞きたいことがあるんですけど」

「何？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つがい」

「てなんですか？」

その質問に、私以外の全員がぎよつとした。

「ノーチエ、“つがい”の意味がわからないって・・・本気で言

ってるのか？」

アジエト様の確認するような声。

「え、あ、はい。初めて聞きました」

「親に教えてもらわなかったのか？」

「私、親、いないから・・・」

その言葉に納得したようにアジエト様は言った。

「“バジャーゾ”に親なし、とはよく言ったものだ」

「親からそういった知識を教わっていないのであれば、仕方ないことでしょう。ただでさえ、そういったものとは縁遠い存在ですからね」

「けれども、それならあの家はどうしたのだ？ あれは明らかに打ち捨てられたものではなく、ちゃんと一から設計し快適に住みやすいように建てられたものだ」

「それは、パパが建ててくれた家だから」

「父はどこにいるのだ？」

「それは・・・わかんないんです。私がまだ生まれてすぐ物心がつくつかないかの時にあそこに連れてこられたから」

「私が思うに、親は竜族の中でもそれなりに地位の高い者である可能性が高いですね」

「根拠はなんだ、ヴィアルジェ」

「あのパプーとかいう子竜ですよ。あれは貴族の間で流行しているペットです。成長しない竜で知能もそれなりにあり、子供の遊び相手としてよく飼われます。個体数が少ないために一般家庭ではとても買える代物ではないですよ」

「確かにそうね。あれは甥っ子たちが持つてるちっこいのと同種よ」
「そうですね、ノーチエ、あなたの親については私が少し調べてみましょう。もしかしたら、見つかるかもしれない。それよりも重要なのは、まずこの娘に“つがい”とは何であり、どういった役目をもつのかを教えることですよ」
「俺が体で教えるっていうのは」

「却下。物事を下半身で考えるのは雄竜の悪いところよ。そうね、ライバルだけど、何の知識もなしじゃフェアじゃないわ。“バジャーゾ”には一生必要のないものだとは思うけど、私は優しいから教えてあげる。ちよつと付いてきなさい、ノーチエ」

フランチェスタさんはそう言つて立ち上がった。私も慌ててフォークを置いて、立ち上がる。フランチェスタさんのところに行こうとすると、私の腕をアジエ様がつかんだ。蒼い瞳が心配そうに見つめている。

「ノーチエ、大丈夫か？フランチェスタは強烈な女だぞ。泣かされたりしないか？」

「えつと」

「心配は無用よ。私がやる時は、もつとえげつない方法で攻めるわ」
ぴしゃりと一蹴し、私の腕をとるとそのままずんと空き部屋の
一室に直進していく。

「ノーチエ」

後ろからアジエ様が付いてこようとしたりけど、それをさえぎるかのようにヴィアルジエさんが立ちふさがった。

「これだから発情期の雄は困る。少しは雌の尻を追いかけるのを
慎みなさい」

「どけ、ヴィアルジエ！」

唸り、威圧するアジエ様に動じることなくヴィアルジエさんは言
った。

「そう不安にならなくとも、“つがい”は必ず無事に返します。あ
なたはまず、この茶会のために滞った政務を少しは片づけてくださ
い」

極寒の笑みと共にどこからともなく大量の書類の山が現れた。

それをアジエ様がひきつった顔で見る。

「ほら、ノーチエ。こつちよ」

フランチェスタさんに連れられ、私はその場を後にした。

お茶会（3）

視界からノーチエが完全に消え去った瞬間、俺の機嫌は急降下した。いや、正確にはノーチエが席を立ちあがった時あたりくらいだったかもしれない。

イライラしながらも、俺は黙々とその怒りを制御すべく書類を次々に片づけていた。

カリカリカリ、ベキッ。

サインをする手に力がこもり、ペンが折れた。

するとひょいと新しいペンが差し出され、またペンが折れる。その繰り返し。

「ペンだって100も200も折れば経費はバカにならないんですからね」

嫌味つたらしいヴィアルジェの言葉に俺も負けじと言い返す。

「お前らが俺からノーチエを取り上げるからだ」

「ああ、嫌だ嫌だ。昨日までは人生を自堕落に過ごし、雌に何の愛情も抱けないまま快楽に溺れていた俺が、たまたま見つけた“つがい”の存在に狂喜乱舞し、勝手に興奮した挙句、周囲を巻き込んで暴走する。最悪のパターンじゃないですか。こんな男、ありえないの典型ですよ。自覚あります？」

「うるさい。お前こそ、“つがい”がそばにいる時の豹変ぶりを教えてやりたい。毎回都合よく“記憶喪失”になつて日に何度も催促して、嫌がる向こうを忘れたふりをして説き伏せて交尾をねだってるそうじゃないか」

「さあ、記憶にありませんね」

ヴィアルジェは表情も変えずにサインされた書類を整理していた。

俺は仕方なく作業にとりかかる。

けれども、しばらくしているとどうにも落ち着かなくなってくる。フランチェスタはプライドが高い女だから、下手したらノーチエに

手を出すかもしれない。あの女ならやりかねない。

不安で不安で仕方なくなつた俺は、気付いた時には二人が入つていつた部屋まで向かつていた。

「王！どこに行かれるつもりですか・・・って、“つがい”のところですね」

「わかつてるなら聞くな」

後ろを呆れたようなため息をついて追つて来るヴィアルジエを追つ払いたい衝動に駆られながらも、俺は最重要事項、つまりノーチェの安否を確認するべく向かう。

目的地の部屋の扉の前まで最短距離で向かう俺の前を何かが立ちふさがつた。

「・・・子竜か」

ノーチェがパプーとか呼んで可愛がつている忌々しいペットだ。先ほどそれなりに遠くまで飛ばしてやつたはずだが、ぽてつとした全体的に丸みのある体に反して、案外飛行速度は遅くはないらしい。

「お前みたいな性悪竜にノーチェは近づかせないぞ」

そう言つて小さい手をぴんと広げ、威嚇する。

俺は失笑した。近づかせせない？どうやって？この俺を妨げることができる生き物など、この世に存在しない。

「そうか。やれるものならやってみろ」

相手にするまでもないソレを、俺は片手ではじき落とした。はずだった。

「いいのか。ノーチェに言いつけてやるぞ」

子竜に触れるほんの手前、そこで俺の手は宙に浮いたままぴたりと止まる。

「知らないぞ。パプーはノーチェの大事なペットだから、パプーに酷いことしたなんてノーチェが知ったら、おまえなんか嫌われちゃつぞ」

「・・・」

俺の手はそれ以上、目の前の子竜に触れようとしなかった。いや、

触れられなかった。ノーチエに嫌われるかもしれない。その思うだけで、今まで一度も感じたことのない感情が俺を蝕む。それが“恐怖”という感情であることなど、どうして俺にわかるというのか。今まで誰も、その感情を俺に与えたものはなかったというのに。

「パプーはおまえと違って器の大きい竜だから、特別にパプーの願いを叶えてくれたら、ノーチエに会わせてやらなくもないぞ」

俺が抵抗できないのを逆手にとった会話に殺意がわくが、こらえたノーチエに会うためには、多少の不愉快なことは耐えねばならないのだ。

「……望みはなんだ？」

俺は子竜を睨みつけて言った。

「パプーはナージエで一番おいしいアップルクッキーが食べたいぞ。ポムチャっていうお店で売ってるやつだ。一日限定100個しかないから、開店1時間前から並ばないと食べられないやつ」

「……わかった、すぐに用意させよう。だから、そこをどけ」
子竜は小さな手でちゅちゅと指を横に振って言った。

「現物をちゃんとう意して渡してくれないと、交渉は成立しないぞ。アップルクッキーをこの目で見ない限り、ここをてこでも動かないぞ」

「ヴィアルジエ、今すぐここにポムチャという店のアップルクッキーを持ってこい！俺が怒りで宮殿を破壊しつくしてしまう前にな！」
俺は決めた。

いつか、この小生意気な子竜に俺を怒らせたことを後悔させてやる。

お茶会（４）

連れて来られた部屋で、私はフランチェスタさんに“つがい”について特別講義を開いてもらっていた。私は椅子に座り、フランチェスタさんが立って身振り手振りでいろいろと教えてくれた。

「“つがい”っていうのは、夫婦のことよ。人間も夫婦を持つらしいけど、竜にとって“つがい”はお互い強い絆で結ばれた者同士のことを指していて、“つがい”同士でなければ決して子を産むことはできないの。だから竜の間では子供がとも出来づらくて、深刻な問題になっているわ。いくら個々が優秀でも、個体数が少なくなるのは一族として致命的だからね。“つがい”は大人になった雄の竜が、本能的に決めるの。実はこれが問題で、なかなか見つからないのよ。高位の竜は特にね。自分の血をひく子を産むために、彼らはそれに見合う強い雌を探すけれども、どうしたって雌は雄に力は劣るものよ。だから、なかなか見つからないって状況になるわけ。アジエトがその典型ね。けれども、アジエトは王だから見つからないじゃ済まされないの。彼には王の血を存続させる責任があるからそこで、私みたいな竜、つまりアジエトの子を産むだけの力があるとなんとか子を産もうと躍起になってるっていうのが今の現状ね・・・」

・・・今の話の半分も理解できてないみたいだけど、説明を続けても大丈夫かしら？」

「・・・大丈夫じゃないです」

「でしょうね。あなた、見るからにおバカそうだもの」

ずばつと気にしていることを指摘されて、私はちよっぴり傷ついた。ふうと軽くため息をつく、フランチェスタさんは両腕をポンつと迫力のある胸の前で組んで言った。

「あなた、アジエトの“つがい”かもしれないっていう自覚ある？」

「えと」

「ないでしょ。見てればわかるわよ。自覚が多少でもあれば、そんなノーテンキになんかできないわ。私たちは、常にライバルの存在に脅かされているのよ。だからこそ己を徹底的に磨き、他者に自分の存在を見せ付ける。この激しい競争に、あなたみたいに取り得もない“バジャーズ”に、一体何ができるっていうの？夢は夢の中で見るものよ。現実で見えるものでは、決してない。そもそも、あなたみたいな発育不良のお子様にアジエトの伽の相手が務まるとも思えないわ」

「……伽？」

かろうじて後半聞き取れた単語を取り合えず言ってみる。

恐る恐るといった私に、フランチェスタさんは深くため息をついて話を続けた。

「伽っていうのは子供を作る行為のことよ……そうね、アジエトがおしべ、ノーチエがめしべだと想像してみなさい」

私は言われたとおりに想像してみる。

大切にしている畑で、アジエト様がおしべ、私がめしべを持っている。

「アジエトがおしべを、あなたのめしべにくつつけるの」

私の手の中のめしべに、アジエト様がおしべをちよんとくつつける。

「そうすると、しばらくしてめしべは蕾となり、蕾は膨らみ、花が咲く」

私は手の中のめしべをアジエト様と一緒に、にこにこしながら見守っていた。

「そして最後は実がなる。その実がつまり、子供ね」

想像の中で、立派に育った大きな実の中からぱかーんと子供が生まれ、アジエト様と万歳している感動のシーンを思い浮かべていた。

「……すごいロマンチック」

二人で精根育て、見守ってきた野菜とか果物から子供が生まれる。毎日の水まきや、風邪の強い日に茎が折れないようにする補強作業、そういった大変な作業を乗り越えて、子供が生まれるって感動。農

家の人たちが愛情をもつて育ててるのは、そういう意味があったんだ。

「あら、ロマンチックだなんて、意外とおませな子ね」

「すごいです、懂れます」

「なんか嫌な予感はあるけど、まあ伽の素晴らしさを少しでも頭で理解できたのならいいわ。実践できるかどうかは、甚だ疑問だけだね。ま、こんなところでしょう。“つがい”についての知識は、これから嫌というほど身をもつて知ることになるでしょうし。それにちらっとフランチェスタさんが視線を扉に向けたので、私も視線をそちらに向けた。

と、同時に破碎音。

「ノーチェ、無事か!？」

かろうじて残ったドアノブの部分を握りしめながら、扉をほぼ木端微塵に破壊したアジエト様が現れた。

「よくわかんないですけど、とりあえずドアの破片とかは当たりませんでした!」

当たったのは木くずとかだけだったので大丈夫でしたよ。なんか大きいのは、フランチェスタさんが全部直前で弾いてくれました。

「ノーチェ」

ドアノブをばいと放り投げると、アジエト様は私のところまでやって来てぎゅっと抱きしめた。あまりにも抱く力が強すぎて、途中ちよつと息が苦しくなってきた。

「アジエト、そのまま抱きしめたら呼吸困難で窒息死するわよ」

とフランチェスタさんが言つて、アジエト様が解放してくれたので私は助かった。

「フランチェスタ、ちゃんとノーチェに“つがい”について教えたか？」

「教えたわよ。けど、それをちゃんとこの子が理解してるかどうかは別問題だからね。そこまで責任は持たないわ。あと、お忘れのようですけど、私はあなたの“つがい”の候補の一人。そしてあなた

の“つがい”の候補は私だけではなく、ディアナもいるのよ。そのあたりを十分に考慮して言動するべきね」

「はつきり言っておまえたなど用済みもいいところなのだが」

「それをあなたが頭のお堅い元老院の老竜たちに言えるのであればいいですけど」

アジエト様は顔をゆがめ、「いずれ、あの老いばれどもには引退してもらうさ」と冷たく突き放すように言った。

「アジエト様」

入口にはひきつった顔をしたヴィアルジェさんが立っていた。

「なんだ？」

「この扉については・・・後でたつぷりと。それより、中断なされたピアジエの王との会談の予定をそろそろ決めないと。先方に長い間滞在されることは好ましいとは言えません」

「・・・オニス様とまた会うの!？」

私はぱあっと顔を輝かせてアジエト様に言った。

その顔を見て、アジエト様は面白くなさそうな顔をして言った。

「そうだ」

「うわー！いいなあ！あの、できればサインとかお願いしてもらってもいいですか？」

「ちよつ、ノーチェ!？あなた、何を言っているのよ!」

「・・・」

慌てたフランチェスタさんを手で制し、アジエト様は「わかった」と一言言うつと出てってしまった。フランチェスタさんがその後を追いかける。

「あれはまた、荒れますね」

黙って見送ったヴィアルジェさんがつぶやく。そして、私を見て言った。

「無邪気な言動は今後慎むようにしなさい。特に敵であるといっても過言ではない人間に好意を見せるのはいけません。君が望んでいなくとも、君は“王のつがい”の候補の一人。周囲はその認識のも

とで君を判断する。軽率な行動は自分の首を絞めかねないということとを、忘れないことです」

そう言つてヴィアルジェさんは出て言つた。

部屋にぽつんと取り残された私は、頬をぽりぽりとかいた。

「ノーチエ」

アップルクッキーを食べながら、パプーがふわふわと飛んでやつてきた。

「食べるか？おいしいよ」

私の頭の上にちゃんと乗ったパプーは、食べかけのクッキーを私に見せて言つた。

「うーん、今はそんな気分じゃないな」

「アップルクッキーが食べられないなんて、損な気分だな」
そう言つてパプーはクッキーを全部食べた。

「・・・パプー、昨日も今日も今まで想像もできなかったことがいっぱい起こるの。これからこんなにくさんいろんなことが起こったら、私、きっと頭の中がいっぱいになっちゃう。私、おバカだから」

ずーっと昔から知っている。

私はものすごくおバカさんだつていうこと。

今だって、ヴィアルジェさんの言つたことの意味がわからない。

私はアジエト様の“つがい”の候補なのかもしれないらしい。けれども、それはどういう意味なの？どうして人間を好きになっちゃいけないの？

「ノーチエ、すっごい変な顔。変顔か？」

いつの間にか私の目の前で私をのぞきこんでいたパプーは、小さな顔をぎゅむつとひっぱって舌を出している。

その変な顔に私はおもわず笑つてしまう。だつてすごくパプーの顔、変！

「なにその変な顔！おもしろいー！！」

「ん？変顔だ。パプーは変顔では誰にも負けない」

どんどん変な顔になっていくパプーがおもしろすぎて、私はそのまましばらくお腹を抱えて大笑いしていた。ようやくそれが落ち着いてきたころには、悩んでいたことなんか、すっかり忘れちゃったんだ。

王のつがい（１）

そのあと誰も来なかったので、放っておかれた私はパプーと一緒に転移装置を使って家に帰っていた。

以前に収穫してとっておいた自家製の野菜をたっぷり煮込んだスープとパンという夕飯を食べながら、のんびりとくつろいでテレビを見ていると、不意に二階が騒がしくなった。

ドタドタつという音と共にアジエ様が降りてきて、その後をヴィアルジェさんがやれやれといった風に付いて来ている。

「えと、こんばんは」

二人がどうしてこんな時間に私の家に来たのかはわからないけど、とりあえず挨拶は大事だからちゃんとしないとね。

「ノーチエ、探したぞ」

そう言っでぎゅっと私を抱く。

なんかぎゅっとするのがアジエ様は好きみたい。会うたびにされるのは、気のせいじゃないよね。

「まったく、軽率な行動は控えるようにと言ったばかりでしょう。何度も言うように君はアジエ様がお認めになった“つがい”の候補なのです。なのに、なんでこのこと家に帰ってご飯食べてるんですか」

「え、だって、夕方になったら家に帰るのは普通」

「君の場合は普通ではありません。すでに後宮には君の部屋を用意してもらっています。しばらくアジエ様はピアジェとの会談のためにコルネリアに滞在しますが、会談が終わり次第、お戻りになります。その時には当たり前ですが、君も同行してもらいますよ。」

それに、コルネリアの来賓室にすでにもう一つ君のために部屋を用意させてもらっています。つまり、君がここに帰ることはもうないのですよ。これからはアジエ様のそばで生活することになるのです」

矢継ぎ早に言われたことに私の頭の中はぐるぐるしていた。

「え、えと」

「ノーチエ、おまえは俺の“つがい”だ。だから、これからは俺と一緒に生活することになるんだ。わかるな？」

「あ、それ、わかりやすいです・・・って、えーーーーー！？」

穏やかに微笑んで言うアジエト様の言葉に私はびっくりした。

だって、今、アジエト様と一緒に暮らすとか言ってなかった？

私の家は、畑は、全部どうなっちゃうの。

「む、無理です！ダメ！私、ここ気に行ってるし。畑もやつと野菜がたくさん実るようになってきたし、チッタ村の人たちは優しくで大好きだし、それにアネツテさんのアップルパイは」

「そちらの都合は関係ありません。全ての決定権は君ではなく、アジエト様にあるのです。よく考えてごらんなさい、ノーチエ。こんな辺鄙な村の生活より、望めば何でも手に入る王宮での生活のほうが遥かに楽しいですよ」

「でも」

「ノーチエ、気持ちはわかるが我慢してくれ。王宮には庭園もある。あそこには国中の美しい花が集められ、とても美しいのだ。きつと気に入る。食べ物だって、お前が望むのであれば、チッタ村から毎日そのアップルパイとやらを取り寄せよう」

「むむー」

私はちよつと考えることにした。

王宮ってどんなところなのか、ちよつと見てみたい気もする。この家も大好きだけど、まあちよつと旅行に行くと思えばいいのかもしれない。まさか、ずーっと生活するなんてとてもじゃないけど考えられないし。きつとアジエト様は庶民で、しかも珍しい“バジャーゾ”なんかと話したことないから、興味があるだけなんだろうし。

「えーと、わかりました。王宮に行きます」

「ノーチエ、嬉しいぞ」

アジエト様は本当に嬉しそうだ。

「物わかりがいいのは喜ばしいことです」

ヴィアルジェさんも目元をゆるませて言う。

「でも、ちよつとお願いがあるんです。それを聞いてもらえますか？」

「ああ、もちろんだ。何でも叶えよう」

「あの、ぜひこの家と畑は私がいなくなった後もちゃんと定期的にお手入れしてもらいたいです。それと、コルネリアにいる間はこの家で生活したいです。やっぱりここが一番落ち着くから」

「ふむ。最初の望みはたやすいが……コルネリアにいる時もここに住みたいというのはちよつと」

「毎日会いに行くつて約束します！晴れの日も、早起きして水まきして行きます！だからお願いです」

私は一生懸命アジエト様に訴えた。

しばらく帰れなくなってしまうんだから、ちゃんと行く前に家の掃除とか、布団を干すとかしておきたいことは山ほどある。それに、村の人に挨拶と何のおみやげがほしいか聞きに行かなくちゃいけないし。

「……いいだろう。本当は嫌だが。ものすごく嫌だが。やっぱりやめて、今すぐ俺と一緒に来てくれると言つてほしいんだが」

「本音がもれてますよ、王。ていうか、ほとんど本音です」

「うるさい、ヴィアルジェ。お前もなんとかして説得しろ」

「はあ。しかし、それも一興だと思いませんか。微妙な距離感を保つ、というのは恋愛の初歩としては有効な手段ですよ。妨害されるほうが燃える、という話はよく聞くでしょう？」

「確かに一理ある。現にこうして俺は焦らされてるわけだしな」

「まあ、本人が意識して“焦らしている”というのは考えられませんが」

よくわからないやり取りを、私はむしゃむしゃとパンを食べているパプーを抱っこしながら見ていた。パプーがちゃっかり私の分のパ

ンも食べていることも、この時には気づいていなかった。

「あの、私のお願い聞いてもらえますか？」

と聞くと、最終的にアジエト様は仕方なくといった風に了承してくれた。

そのあとはしばらく私の隣でおしゃべりして、ヴィアルジェさんが「用は済んだので戻りましょう」と言う言葉を無視し続けたアジエト様だったけど、さすがに私が「明日早起きしてお仕事しなくちゃいけないので寝かせてください」と告げるととても残念そうな顔をして帰って行った。

うーん、なんか王様って怖いイメージあったけど、アジエト様はちよつと違うみたい。でも、オニス様も王様だけど優しそうな感じだったし、もしかしたら王様って本当はみんな優しい人たちなのかもしれない。

そういえば、オニス様は今どうしているのかな？

ヴィアルジェさんがまた会談があるって言ってたから、アジエト様に頼めば、もしかしたらまた会わせてくれるかもしれない。サインって言ってアジエト様の機嫌が悪くなってしまったから、きつとサインは王族の人たちに頼んじやいけないことなんだろう。確かに、庶民が寄ってたかってサインをねだったら迷惑だし。よし、明日はもう一度オニス様に会わせてもらえないか頼んでみよう。そんなことを思いながら、私はすっかり冷めてしまったスープをごくごくと飲み干すパプーをぼんやりと眺めていた。

王のつがい(2)

むにつ。

「パプー？」

頬に感じる“違和感”に、私は重いまぶたをうつすらと開ける。

ぼんやりとした視界に金髪碧眼の秀麗な顔が目飛び込んだ瞬間

「むきやーーーーーーー！！？」

悲鳴をあげた。

「ああ、やっと起きましたか。君は運がいい。もう少しでその可愛らしいほつぺたをひきちぎるところでした」

にこにこ穏やかな笑みを浮かべて怖いことを言われた！

ビビってベッドの端っこに避難した私にヴィアルジェさんは「5分以内に身支度を整えてくださいね」と言って部屋を出た。

すっかり眠気の吹き飛んだ私が着替えをして、顔を洗って鏡を覗き込むと、右頬がほんのり紅くなっていた。どうやらけっこう長い間つねられていたみたいだ。

「うわー。今度からは気をつけよ」

このままだと、いつか本当に私の頬はなくっちゃうよ。

なんでヴィアルジェさんがここににいるのかは、意外とすぐにわかった。

だって起きた時には、もうとっくに予定ではお仕事が終わっている時間だったのだ。

「本当にすみませんでした」

ヴィアルジェさんが用意してくれた朝ごはんを食べながら私は謝った。

水まきも朝ごはんの準備も全部ヴィアルジェさんがやってくれたのだ。

パプーがいつものように私を起こしに来なかったのも、ヴィアルジエさんがちゃんと朝ご飯を用意したからだ。

「想定内です。ですが、だからといっていつもやられては困ります。今後は気をつけるように。あと、今日の服装なのですが、あとでフランチエスタに見立ててもらいましょうね。そんな田舎もの丸出しの格好ではとてもではないが、見せられない」

「今日は何かあるんですか？」

「今日は先月、誰かさんのせいで中止せざるを得なかった会談を含めた晩餐会が開かれるのですよ。晩餐というのは公式なもので、一族の中でも特に優れた血統を持つ者、つまり貴族たちも参加が認められます。人間のほうは王とその取り巻き連中ですが。この式では、君を“王のつがい”の候補の一人としてお披露目する意味もあります。つまり、どうすればいいと思いますか？」

「あ、えと、その、頑張ります！」

「具体的には？」

「ぐ、具体的には、えっと」

「我々がどうすればいいのか事前に教えますから、その通りに動きなさい」

「は、はいっ！」

「よろしい。では、そろそろ行きましょうか。やることはいっぱいあるのですよ。君の寝坊のせいで、だいぶ時間がおしているのですからね」

「はいっ。あ、あの、パプーは」

「・・・連れていきたいなら、好きにきなさい。けれども、悪さはさせないように」

そう言つて、しゅんと転移装置を使って行ってしまった。

私はテレビを見ていたパプーに向かって言った。

「おいで、パプー！」

ぴこつと尻尾が反応して、パプーが振り返る。

「お、出かけるのか？」

「そうだよ、一緒に行こう！」

「いいぞ」

こっちに飛んできたパプーを胸に抱っこして、私は転移装置をくぐった。

ぐにやりと視界が歪んだ瞬間、目の前は煌びやかな室内。

目の前には、フランチェスタさんとメイドさんがたくさん立って私を取り囲んでいた。

「うわ」

「ふふっ、アジエトはヴィアルジエが政務に引つ張って行っただわ。邪魔が入らないうちに、とっとと取りかかるわよ」

獲物を目の前にしたかのように、ペロりと舌が真っ赤なルージユの唇を舐めた。

それから私はフランチェスタさんの指示のものとテキパキと動くメイドさんによつて着せ替え人形みたいにいろんな服を着せられていた。

「うーん、これは流行遅れだし、これもなんだかスタイルに合っていないし」

なかなか決まらないのは、たぶん私のスタイルがあまりにも貧弱すぎるからだと思う。朝から晩まで働いているから太ってるわけじゃないんだけど、それにしても胸はないし、足短いし、寸胴だし、とにかくドレスが似合わない体型なのだ。

「はあ。どれを着せてもお子様に見えないわね。仕方ないわ、こんなこともあるうかと姪っ子のドレスを持ってきておいたから、それを着せてみせてちょうだい」

私が着せられたのは、リボンやフリルやレースがいっぱいついててとにかく体の露出が少ない清楚で可愛い白いドレスだった。まっすぐにおろされた髪にも、レースの白いリボンの髪飾りがつけられ、まるで貴族のお嬢さまみたい。

「うーん。ま、妥協点ね。とても夜会用のドレスとは言い難いんだけど、お披露目するぐらいならなんとかなるでしょう」

「すごい高そう・・・」

「ん？まあ、使われてる素材もデザイナーも一流だから高いと聞かれれば高いわね。でも貴族の使うドレスの中ではわりと安いほうよ？とはいっても、庶民の家一軒は軽く建つけどね」

「えーっ！？」

この洋服と私の家の価値が同じ！？信じられないよ！

私はまじまじと自分のドレスを見た。

「その白い生地はシルクって言って、人間たちのいる国でしか手に入らない希少価値の高いもののよ。取り扱う店も、それをちゃんと服に仕立てる者もほとんどいないから、必然的に値段が高くなっちゃうの」

「ほえー」

「ほら、ボーツとしてないで次は化粧よ。それが終わったら次は作法の練習！やることはたくさんあるんだからね」

「あの、フランチエスタさん。あとで、あの、必要なことを書いたメモとかくれませんか・・・？絶対に忘れる自信があるので」

「何言ってるの。そんなの見る暇なんかないわよ。作法はスポーツ！頭じゃなくて、体で覚えなさい」

「えーっ！！運動音痴なのに」

そのあと私はずーっとフランチエスタさんに怒られながら、半べそをかい作法の練習をみっちりしごかれたのだった。

王のつがい(3)

べきべきべき。

手の中のペンが木端微塵になって砂のように机の上に広がる。

すると俺のためだけに特別に開発されたペンが手渡された。大抵機嫌を損ねているとき、見かねたヴィアルジェはそれを俺に差し出す。つまり、今の俺は機嫌を著しく損ねているということだ。

「・・・・・・ノーチエは」

「執務に集中なさってください」

舌打ちし、俺は目の前の紙にサインを書く。

何十枚という紙のサイン欄にサインをし終えた頃、俺はとうとう我慢できずに立ち上がり、ドアに向かって直進した。

「今日の仕事は終わりだ」

「まだ終わりじゃありませんよ。今日のノルマを達成しただけなんですから。いくらでも仕事はあります」

「だが、やる必要はないだろう。そろそろノーチエに会わせろ」

「今行ったところでフランチエスタに門前払いされるだけですよ。」

行ったところで、邪魔なだけです。結果的に困ることになるのはあなたと彼女なんですよ?」

「・・・・・・ぬう」

口惜しいが、ヴィアルジェの言うとおりだった。

俺はともかく、経験も知識もないノーチエには学ぶ時間が惜しいはずだ。

「どうせ後で会えるんですから、今は我慢なさったらどうですか」俺はドアノブに向かって出しかけた手をひっこめ、執務机に戻ることにした。

椅子に座りなおした俺の前に、ヴィアルジェが芳醇な香りの紅茶を

出す。

「それにしても会談とお披露目を並行でするなんて信じられない話ですよ。周囲の困惑を理解していますか、王？ いったい同時にやることに何の意味があるというのです」

「意味？ 意味ならあるさ。会談は、愚鈍で嫉妬深い貴族たちの視線をそらせる格好の的になる」

紅茶を一口含み、俺は言った。

その一言で俺の言いたいことを理解したヴィアルジェは呆れたようにため息をついて言った。

「……まったく、自分勝手なことを。何度も何度も申し上げていますが、少しは振り回される周囲の身になってください。特に側近は大切にしてください。このまま改善されないようであれば、いつか職務放棄しますからね」

俺はにやりと笑った。

実は今回の一番の苦労人はヴィアルジェだった。

貴族たちやピアジェの王への招待状の作成、場所の運営、そういった雑事を総括しているヴィアルジェの心労はなかなかのものだろう。ここ数日小言ばかりのヴィアルジェに対して少々腹にすえかねていたこともあったし、なによりノーチェのお披露目は慎重かつ速やかに行われるべき最重要事項だったため、ヴィアルジェに任せるのは都合がよかった。優秀な側近がすべてを完璧にお膳立てしてくれるだろう。俺としても、ノーチェのエスコートをするので精一杯だしな。

「ピアジェの王も、気の毒なものだ」

「本当にそう思っているのか？」

「いえ、まったく。ただ王にちょっと嫌味を言いたくなくなっただけです」

俺は低く笑い、飲み干した紅茶のカップをおいた。

人間との講和など、いまさら俺にとってはどうでもいい。

最初は“気まぐれ”のつもりだったが、それも今となってはもはや

意味もない。

ただ貴族どもからノーチエを追い払うためには、何か余興が必要なのだ。

俺にとって会談などオマケ。

ただの余興だ。

それ以上でも以下でもない。

「余興は退屈に飽きた貴族どもにはちょうどいい。そうだろうか?」

王のつがい(3) (後書き)

本業が忙しくてなかなかできないんですけど、とりあえずちょこっと更新！

王のつがい（４）（前書き）

多少性的な表現が含まれている部分があります。
露骨ではないのですが、御不快に思われる方は読まないようにしてください。すみません。

王のつがい（４）

部屋中が金ぴかのダンスホール。

今まで見たことのないおいしそうな料理。

上品で優雅な物腰の人々。

それはまさに、絵本で読んだ舞踏会のワンシーンとそっくりだった。
「うわー、うわー、うわー」

物珍しさに惹かれ、ダンスホールの二階に設けられた特別室から私はそれを身を乗り出して眺めていた。平均より背の低い私は、下に誤って転落しないように設置されている大理石の手すりのせいでちゃんと見えないのでこうするしかないのだ。

その横ではアジエト様がそれをハラハラしながら見ている。いくら私がドジだからって、まさか転落して死亡ってことにはならないんだけどな。

奥のテーブルにはフランチエスタさんが優雅に紅茶を飲み、パプーは用意されていたフルーツを次々に食べていた。ヴィアルジエさんはお仕事でいならしい。朝に会ったきり、それから一度も会っていないかった。

それにしても……。

ちらつと私は隣のアジエト様に視線をうつし、口を隠してにんまりする。

だって私をお姫様抱っこして額にキスしたんだよ！

絵本でしか見たことがないやつ！

しかもその後にはすぐ「舐めまわしたい」とか「食べたい」とか「かじりたい」とか言い始めたからビックリした！あとなんか「おかしい」とか言ってたけど、どういう意味かな。「おかし」ってやっぱりお菓子だね。そう考えると、「おかしい」ってお菓子みただから食欲がそそるって意味かな。うん、そうだ。きっとそうに違いない。

確かに私は肌白いし、全体的に肉付きも良くてぷにぷにしてるから食べ物みたいって言われちゃうのも仕方ないのかもしれない。さつき鏡で見たけど、お化粧品とかキレイなドレスで全体的に映えた格好は、なんだかケーキの上に乗っかってる砂糖菓子のお人形さんみたいだった。どうも私はこういう格好が似合わない星の下に生まれてしまったみたい。

「ノーチエ、どうした？何か嫌なことでも思い出したのか」

もんもんしている私の様子を感じ取ったのか、隣にいるアジエ様が私の頬を手で撫でながら言った。

「いえ、なんでもありません。ただ、私、ドレス似合わないから、これでお披露目とかちゃんとできるかなって」

「何を言っている、お前ほど愛らしい者がいるものか。このドレスだって、よく似合っている。・・・他人に見せるのも嫌なくらいにな」

「はあ、ありがとうございます」

「お前は世界で一番美しいぞ」

そう言って私の手を取り、口づけた。

・・・フォローしてくれたんだと思うけど、ちょっと大げさすぎて逆効果になっちゃってる。超美形に「世界で一番美しい」って言われても、ねえ。それは私じゃなくて、アジエ様だと思うし。それに、なんで手にキスするの？私、手を洗ってないし、いろんなとこペタペタ触っちゃったからちよっと汚いよ。

私にはアジエ様の言動のひとつひとつが難しい。

というか、今日のお披露目だって私がアジエ様の“つがい”であるってことをみんなに知らせるものらしいし、それってどういうことなのかな。そんなことをする必要はないと思うんだけど。

うーん。

・・・そういえば、お腹も空いてきたなあ。

朝ごはん食べたつきりで、それからずーっと作法のお勉強してたから、きつとお腹はペコペコだ。せっかくだから、下に降りてあのおいしそうな料理を食いたいんだけど、なんか今はここで呼ばれるまで待っていなくちゃいけないそうだ。もう少しの辛抱だから、我慢しなきゃね。

ダンスホールを見るのに飽きて後ろを振り返ると、フランチエスタさんのもとに渋い執事のおじいさんがやってきて、耳元でささやいていた。それをじっと見ていると、フランチエスタさんは執事に頷き、アジエト様を呼んだ。

「アジエト、用意が出来たそうよ。あのピアジェの・・・なんと言ったかしら」

「オニス様！」

「そうそう、そんな名前だったわ。って、ノーチエ、なんで名前を知ってるの？」

「人間の名前は忘れないよっ」

「・・・はあ、それをアジエトの横で堂々と言わないでちょうだい。アジエトも、いちいち反応して機嫌を悪くしないで？他の竜の一族の者たちもいるのだから、くれぐれも“いつものあなた”を通してちょうだいね」

「俺に指図するな。ノーチエ、俺に手を」

私は慌ててポケットにしまいっぱなしの白い手袋をつけ、アジエト様に手を差し出した。この後は、アジエト様が私を連れて行ってくれるはずだから、大人しく付いていけばいいんだよね。

教えられたとおりのことを必死に思い出す。間違ってないといいなあ。

「フランチエスタ、お前はディアナのどこにでも遊びに行ってる。アイツがちよつかいをノーチエにかけないようにな」

「ディアナのどこ？嫌よ。あんな性悪根暗女のとなんて。私は両親が来ているから、そちらにいるわ。ディアナの相手はヴィアルジエにでも任せたら？ああ、もっとも彼の大事なペコーがいたら無理

かもしれないですけど」

「・・・俺は呼んでないが、アイツが呼んだ可能性は十分に考えられるな」

「まあ、ディアナも挨拶代わりにドレスを破いたり、足を踏んづけたりはするかもしれないですけど、命に関わるようなことはしないはず。この際、放っておけばよろしいのでは？」

「できるか。お前の話を聞いて、ますます不安になったぞ」

「遅かれ早かれいずれ通る道ですわ。さ、外に出てくださいますわ。

王の登場を、皆が心待ちにしていますわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2138q/>

ヴィーゲンリート デア ノーチェ

2011年2月11日23時04分発行